

## 関係志向性・活動志向性尺度作成の試み

青木 素子<sup>1</sup> 新井 邦二郎<sup>2</sup>

本研究は、人が何に生きがいを持つかに興味を持つところから出発し、関係志向性・活動志向性の質問紙の作成ならびにそれらと人格的成長、人生における目的、自律性、自己受容、環境制御力、積極的な他者関係の持ち方などの心理的 well-being との関連について明らかにすることを目的とした。

まず関係志向性を「家族や友人関係など具体的な人間同士の関わりに人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向」と定義し、活動志向性は「やりたいこと、やらなければならないことがあり、それらの活動を行うことに人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向」と定義した。

研究1では、3種類の関係志向性・活動志向性の質問紙を作成した。質問紙Ⅰは、各志向性を表す文章表現を対にして提示して、いずれかを選択させる質問紙で50項目からなる。質問紙Ⅱは、各志向性を表す単語や人名を対にして提示して、いずれかを選択させる質問紙で21項目からなる。質問紙Ⅲは、場面想定をして、各志向性を表す行動のいずれかを選択させる質問紙で、10項目からなる。3つの質問紙の妥当性の検討を行なった。研究2は、関係志向性・活動志向性と心理的 well-being との関連を明らかにしようとした。

その主な結果は、次のとおりである。①質問紙Ⅰに一定の妥当性が見出された。②関係志向性と活動志向性に性差が見られなかった。③関係志向性は、積極的な他者関係と関連が見られた。④活動志向性は自律性と関連が見られた。

キーワード：生きがい、関係志向性、活動志向性、心理的 well-being、大学生

### 問題と目的

人生における価値や喜び、満足の在り方を考えたとき、人によってその要因となるものは違うと思われる。例えば、結婚したら仕事を辞めて家庭に入りたいという人と、結婚しても仕事を続けたいという人がいる。仮に前者を家庭志向、後者を仕事志向と名付けると、どうしてこのような違いが現れてくるのだろうか。経済的な面はともかく、前者は家庭の中の間人間の間に生きがいを持つようとしているのかもしれない。後者は仕事にやりがいや生きがいを見出そうとしているのかもしれない。仕事を生きがいにする人の中にも、仕事を通して人と交わることに、やりがいを持つようとする人もいるし、それとは別に、仕事の遂行自体に生きがいを持つように見受けられる人もいる。こうした違いを説明する概念として、関係志向性・活動志向性というものを想定することができるのではないだろうか。「家族や友人関係など具体的な人間同士の関わりに人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向」を示す関係志向性、ならびに、「やりたいこと、やらなければならないことがあり、それらの活動を行うことに人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向」を示す活動

志向性を本研究で取りあげたい。

精神科医の島崎(1974)は、生きるとは何かという視点から、生きがいは「居がいい」と「行がいい」の二面性を持つと論じている。そもそも彼によれば、生きがいの「甲斐」とは「貝」からきており、貝とは昔、貨幣の代わりに用いられたもので、そこから敷衍した言葉で価値を表すものである。そのうえで、甲斐のある生活、充実感のある人生は、前進・向上の人生に尽きるものではない。彼は、生きることは、前進・向上よりもっと基礎的なもの、それはなによりもはじめに、まず「人とともに地上に生きる」ことであると述べている。すなわち、まず仲間と一緒に生きて「居る」という土台が前提として保証されているということ、その上に立ち上がって、自分から生活を築いて「行く」前向きの視線と足取りが生まれる。仲間と一緒に生きていることの生きがいは「居がいい」であり、前進・向上していくことの生きがいは「行がいい」と呼ばれている。ここでいう「居がいい」や「行がいい」は、それぞれ関係志向性と活動志向性の定義内容にほぼ対応すると考えられる。また、エリクソン(1950)によれば、「正常な人間にできなくてはならないことは何か」と問われたS.フロイトは、「愛することと、働くこと(Lieben und Arbeiten)」と答えたそうである。「愛すること」とは関係志向性に対応する部分であり、「働くこと」とは活動志向性に対応する部分であると考

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

られる。両者は正常に生きていく上で必要不可欠であるが、これら2つの性質の強弱により個人の心理的特性を調べることは興味深い。

国内外の生きがい論を検討した小林(1989)は、すべての人間が、情緒的な健康や人格への完成へと向かい、また人間の内に潜んでいる可能性を伸ばしたいという固有の自己実現衝動をもっているし、生産的 생활や、調和と愛情を求める傾向をもっており、この成果と密接につながっているのが「生きがい」であると述べている。活動志向性は固有の自己実現衝動と、関係志向性は調和と愛情を求める傾向と、密接につながっている生きがいと考えられるのではないだろうか。

これまでに、人のなんらかの価値観をベースにしたパーソナリティ特性として、様々な理論が提唱されている。古くはシュブランガー(1919)が、文化価値という観点において、人を理論型、審美型、経済型、宗教型、権力型、社交型の6つに類型立てている。中でも社交型は、人を愛し、協調性を重要視するもので、これは関係志向性と非常に近い概念といえる。伊藤(1993)は、適応の場面において、個人志向性と社会志向性の2側面をあげている。ここでいう志向性とは、自己概念を形成する際の基準の方向性を意味している。個人志向性は、自分自身の内的基準への志向性であり、その主な内容は、個人の個性や信念、自己決定を貫こうとしている性質を取り上げているものである。それゆえ、本研究の活動志向性はこの個人志向性をその中の一部として含むものと理解できる。他方、社会志向性は、他者への協調、あるいは社会の規範への志向性であり、社会の中で他者から好かれて生きていくための特性を意味している。これは関係志向性と他者との関係を重視する点では共通しているが、関係志向性は他者との協調、社会規範の遵守以外の他者との関わりも含んでいるので、社会志向性は関係志向性の一部として含まれると理解できる。

生きがいや充実感をあつかった先行研究のなかでは様々な年齢層が対象とされている。藤木・井上(2007)は、中学生の生きがい感について体験的な尺度項目を作成し、生きがい感体験を得るほど自己を尊敬し、価値ある人間だと感じられること、他者からの受容と親密さ、親和性が強いほど、生きがい感を強く感じられることを示した。大野(1981)は、青年の充実感に関する研究のなかで、連帯感や信頼、自立や自信を持つ人ほど、充実感と生きがい感を得やすく、アイデンティティの統合もなされると述べている。

三隅(1966)は、集団機能の観点からリーダーシップの類型化を試み、人間関係を円滑にし、チームワークを強化、維持する集団維持型(Maintenance)と目標設定により成績や生産性を高める課題遂行型(Performance)の2つの強弱により、4つに分類したPM理論を提唱した。集団維持型は関係志向性に、課

題遂行型は活動志向性にそれぞれ近いリーダーの行動特性であると思われる。

以上のような議論のうえにたつて、人生価値、つまり生きがいの在り方の傾向という観点から、関係志向性・活動志向性測定尺度を作成し、それぞれの心理的諸特徴を明らかにすることを目的とした。

研究1 関係志向性・活動志向性尺度の作成

研究2 関係志向性・活動志向性と心理的 well-being の諸側面との関連についての検討

## 方 法

### 1. 予備調査

#### 関係志向性・活動志向性尺度の項目の収集・精選

大学院生17名を対象に、関係志向性については、「家族や友人関係など具体的な人間同士のかかわりに人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向や人のタイプ」、活動志向性については、「やりたいこと、やらなければならないことがあり、それらの活動を行うことに人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向や人のタイプ」の文を提示し、各々の人物像、行動像などを自由記述で回答を求めた。その後、収集されたそれらの約120の回答を、心理学系の専門家と大学院生で、KJ法を用いて各志向性の項目の精選を行った。

### 2. 本調査

**調査対象** 首都圏の私立大学生234名。回答に不具合が見られたものを除外し、最終的に220名(男性94名、女子126名)。

**調査時期および手続き** 2013年7月の複数の日に、授業または大学構内にて無記名の個別記入形式の質問紙を実施した。

#### 調査内容

##### (1) 関係志向性・活動志向性質問紙

予備調査の結果をもとにして作成した3種類の関係志向性・活動志向性の質問紙を実施した。

##### ① 対となっている文章の強制選択による質問紙(質問紙Ⅰ)

たとえば、「自分は友人とのかかわりに満足を感じる」(関係志向性)と「自分は仕事や趣味に没頭することに満足を感じる」(活動志向性)の2つの文章を示して、どちらが自分に近いかを選択させた。全部で50項目。選択された志向性の文章の数の合計を、それぞれ関係志向性得点、活動志向性得点とした。それぞれ最低得点0点~最高得点50点。

##### ② 対となっている単語の強制選択による質問紙(質問紙Ⅱ)

たとえば、「協調」(関係志向性)と「個性」(活動志向性)の2つを示し、どちらが好きな言葉であるかを選択させた。全部で21項目。選択された

志向性の単語の数の合計を、それぞれ関係志向性得点、活動志向性得点とした。それぞれ最低得点0点～最高得点21点。

③ 場面想定法による質問紙（質問紙Ⅲ）

たとえば、「毎日ほぼ同じ内容の仕事だが、スタッフが和気あいあいとしている職場」（関係志向性）と「先端的な知識や技術が求められ、スタッフがしのぎを削りあっている職場」（活動志向性）の2つを示し、「あなたならどちらの職場で働きたいと思いますか?」と尋ね、選択させた。全部で10場面。選択された志向性の場面の数の合計を、それぞれ関係志向性得点、活動志向性得点とした。それぞれ最低得点0点～最高得点10点。

(2) 人生目標尺度ならびに日本版 PIL 尺度

上記の3種類の関係志向性・活動志向性質問紙の、妥当性の検討を行うために実施した。人生目標尺度（堀毛，2009）のうち、「自己実現目標」因子、「対人調和目標」因子から8項目を選択し、日本版 PIL（Purpose-In-Life Test）尺度（佐藤・山口・斉藤・田中・千葉・岡堂，1993）のうち、「目的・意味」因子から5項目を用いた。「あてはまらない」（1点）～「あてはまる」（7点）の7件法。

(3) 心理的 well-being 尺度

関係志向性・活動志向性とパーソナリティの諸側面との関連を見るために実施した。心理的 well-being 尺度（Ryff,1989, 西田,2000）から、次の下位尺度を選択し使用した。なお心理的 well-being とは、「意志的・主体的によく生きているという比較的安定した感覚」と定義されるものである（西田，2000）。

- ① 人格的成長（8項目）…発達と可能性の連続上において、新しい経験に向けて開かれている感覚。
- ② 人生における目的（8項目）…人生における目的と方向性の感覚。
- ③ 自律性（8項目）…自己決定し、独立、内的に行動を調整できるという感覚。
- ④ 自己受容（7項目）…自己に対する積極的な感覚。
- ⑤ 環境制御力（6項目）…複雑な環境を統制する有能さを感じ、自己に適した文脈を選択し想像できるという感覚。
- ⑥ 積極的な他者関係（6項目）…暖かく満足でき、信頼できる他者関係を築いているという感覚。

上記の6つの下位尺度は「全くあてはまらない」（1点）～「非常にあてはまる」（6点）の6件法で行われた。

## 結 果

### 研究 1

(1) 質問紙 I, II, III の得点分布

本研究で作成した関係志向性・活動志向性の質問紙 I, II, III のヒストグラムを Figure1, 2, 3, 4, 5, 6 に示す。いずれもそれぞれほぼ正規分布に近い得点分布を示している。

(2) 質問紙 I, II, III の男女差

それぞれの質問紙の関係志向性得点と活動志向性得点の男女別の平均値を Table1 に示す。t 検定の結果、いずれの質問紙においても男女差は見られなかった。

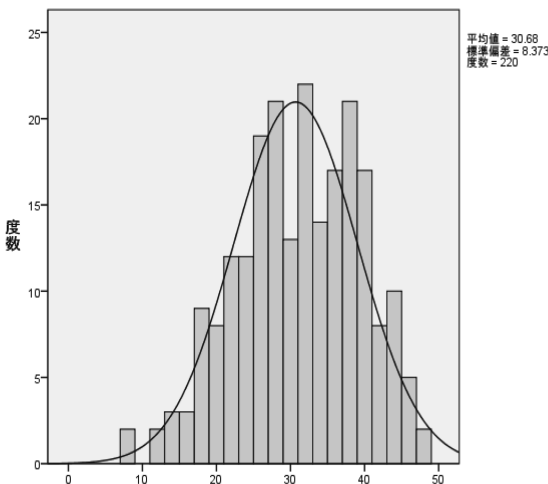


Figure1 質問紙 I の関係志向性の得点分布

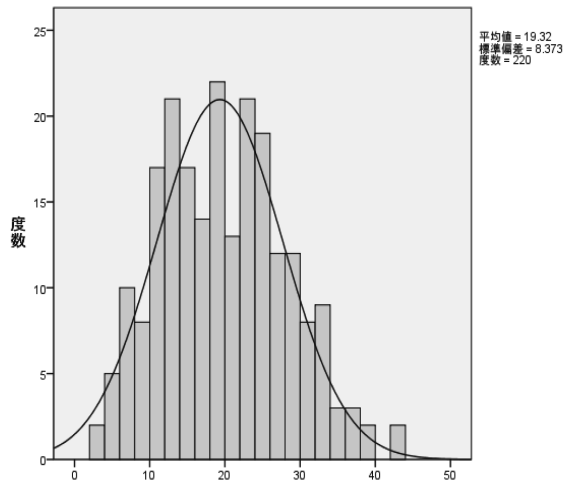


Figure2 質問紙 I の活動志向性の得点分布

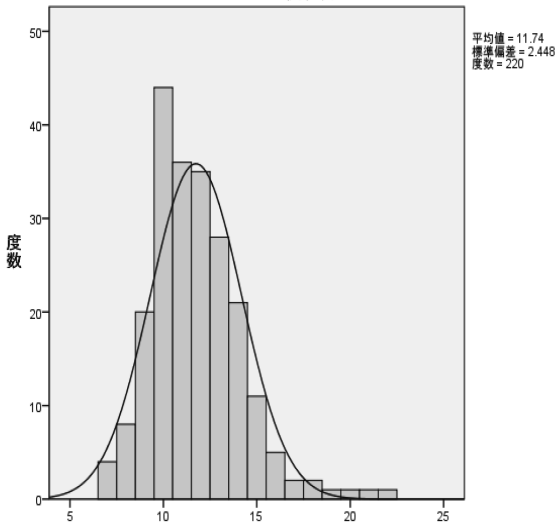


Figure3 質問紙Ⅱの関係志向性の得点分布

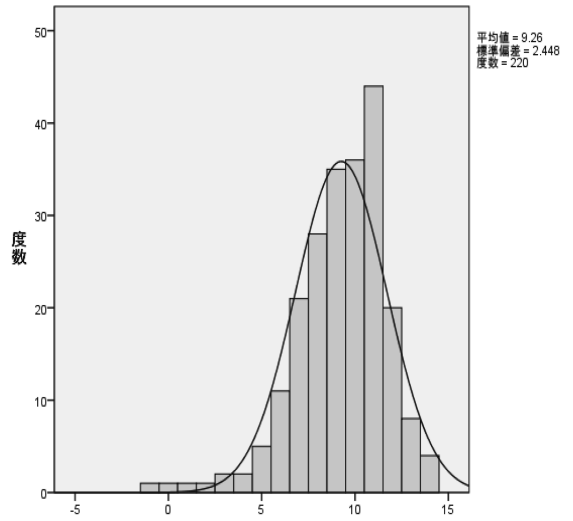


Figure4 質問紙Ⅱの活動志向性の得点分布

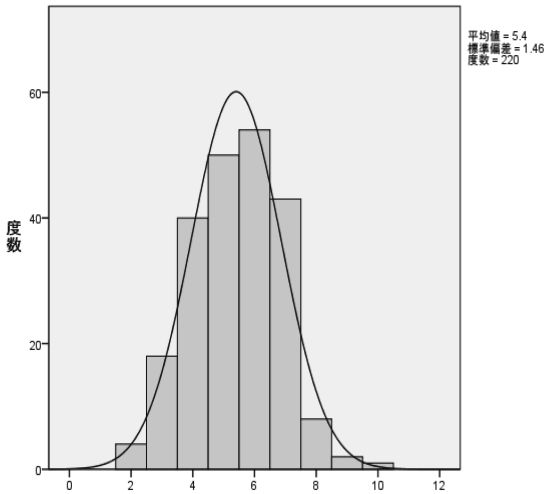


Figure5 質問紙Ⅲの関係志向性の得点分布

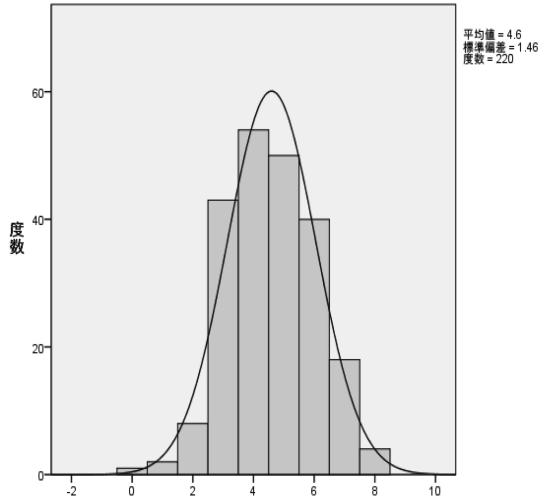


Figure6 質問紙Ⅲの活動志向性の得点分布

Table1 関係志向性得点・活動志向性得点の平均値

質問紙			平均値	標準偏差	t 値	有意差
I	関係志向性	男性	30.21	9.44	.71	n.s.
		女性	31.03	7.49		
	活動志向性	男性	19.79	9.44	.71	n.s.
		女性	18.97	7.49		
II	関係志向性	男性	11.63	2.49	.59	n.s.
		女性	11.83	2.42		
	活動志向性	男性	9.37	2.49	.59	n.s.
		女性	9.17	2.42		
III	関係志向性	男性	5.43	1.60	.18	n.s.
		女性	5.39	1.35		
	活動志向性	男性	4.57	1.60	.18	n.s.
		女性	4.61	1.35		

(3) 妥当性の検討

まず、妥当性を見るための質問紙（人生目標尺度ならびに日本版 PIL 尺度）の因子分析（プロマックス回転）を行なった結果、Table2のような2因子が得られ、第1因子を「自己実現」、第2因子を「対

人調和」と名付けた。関係志向性・活動志向性の各質問紙で得られる関係志向性得点と下位尺度「対人調和」との相関が正の相関となり、活動志向性得点と下位尺度「自己実現」との相関が正の関係となることが予想される。

Table2 人生目標尺度ならびに日本版 PIL 尺度の因子分析結果

	因子負荷量	
	I	II
<b>I. 自己実現</b>		
7. 私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある。	.80	-.10
13. 人生の目標の実現に向かって着々と進んでいる。	.78	.00
6. 私という人間は目的をもった非常に意味のある存在だ。	.74	-.01
1. 生きていくうえで非常にはっきりした目標や計画がある。	.74	-.07
2. 自分の目標を追求したい。	.70	.00
10. 人生にははっきりとした使命と目的を見出している。	.67	.01
3. 自分を向上させることが目標である。	.58	.17
<b>II. 対人調和</b>		
8. 円滑な家庭を築きたい。	.01	.72
9. よい人間関係を築くことは人生において重要である。	-.10	.71
11. 人のために尽くしたい。	-.03	.67
12. 人間らしく生きたい。	-.00	.66
5. 人生を楽しむことが大切である。	-.00	.66
4. 生きがいをもっていきたいと思う。	.29	.46

Table3 質問紙 I と人生目標尺度ならびに日本版 PIL 尺度との相関

	対人調和	自己実現
関係志向性	.26**	-.07
活動志向性	-.26**	.07

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table4 質問紙 II と人生目標尺度ならびに日本版 PIL 尺度との相関

	対人調和	自己実現
関係志向性	.02	.12*
活動志向性	-.02	-.12*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table5 質問紙 III と人生目標尺度ならびに日本版 PIL 尺度との相関

	対人調和	自己実現
関係志向性	.10	.15*
活動志向性	-.10	-.15*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

## 1) 質問紙Ⅰの妥当性

関係志向性・活動志向性の質問紙Ⅰと妥当性をみる質問紙の下位尺度との相関を Table3に示す。関係志向性と対人調和の相関は、 $r=.26$ と1%水準で有意であった。また、活動志向性と自己実現の相関は  $r=.07$ と正の関係ではあったが有意でなかった。

## 2) 質問紙Ⅱの妥当性

Table4が示すように、関係志向性と対人調和の相関が  $r=.02$ と正の相関であったが有意でなかった。活動志向性と自己実現の相関は  $r=-.12$ で負の相関の関係となり有意であったが、これは予想と異なっていた。

## 3) 質問紙Ⅲの妥当性

Table5が示すように、関係志向性と対人調和の相関が  $r=.10$ と正の相関であったが有意でなかった。活動志向性と自己実現の相関は  $r=-.15$ で負の相関の関係となり有意であったが、これは予想と異なっていた。

以上のような結果から、妥当性が一定程度確認された質問紙Ⅰを関係志向性・活動志向性質問紙に用いることにした。

## 研究 2

質問紙Ⅰの関係志向性得点・活動志向性得点からそれぞれの平均値を基準にして高群と低群にわけ、関係志向性得点の高群を「関係志向性群」、活動志向性得点の高群を「活動志向性群」とした。心理的 well-being の下位尺度である6側面それぞれについて、関係志向性群と活動志向性群の平均値の差を求めた結果を Table6に示す。

(1) 関係志向性・活動志向性と「人格的成長」の関連  
 $t$  検定の結果、「人格的成長」において、関係志向性群と活動志向性群との間に有意な差は見られなかった。したがって、関係志向性群と活動志向性群の間に「人格的成長」との違いは見られないことがわかった。

(2) 関係志向性・活動志向性と「人生における目的」の関連

$t$  検定の結果、「人生における目的」において、関係志向性群と活動志向性群との間に有意な差は見られなかった。したがって、関係志向性群と活動志向性群の間に「人生における目的」との違いは見られないことがわかった。

(3) 関係志向性・活動志向性と「自律性」の関連

$t$  検定の結果、「自律性」について、活動志向性群において関係志向性群よりも、5%水準で有意に高い値が見られた。したがって、活動志向性群は関係志向性群よりも、「自律性」の強いことがわかった。

(4) 関係志向性・活動志向性と「自己受容」の関連

$t$  検定の結果、「自己受容」において、関係志向性群と活動志向性群との間に有意な差は見られなかった。したがって、関係志向性群と活動志向性群の間に「自己受容」との違いは見られないことがわかった。

(5) 関係志向性・活動志向性と「環境制御力」の関連  
 $t$  検定の結果、「環境制御力」において、関係志向性群と活動志向性群との間に有意な差は見られなかった。したがって、関係志向性群と活動志向性群の間に「環境制御力」との違いは見られないことがわかった。

(6) 関係志向性・活動志向性と「積極的な他者関係」

Table6 関係志向性群・活動志向性群における心理的 well-being の平均値

心理的 well-being の6下位尺度		平均値	標準偏差	$t$ 値	有意水準
人格的成長	関係志向性群	38.53	5.72	.25	<i>n.s.</i>
	活動志向性群	38.31	6.77		
人生における目的	関係志向性群	28.91	8.63	.23	<i>n.s.</i>
	活動志向性群	28.63	8.92		
自律性	関係志向性群	30.33	7.50	.23	$p<.05$
	活動志向性群	32.75	7.67		
自己受容	関係志向性群	23.00	6.48	.07	<i>n.s.</i>
	活動志向性群	23.07	7.17		
環境制御力	関係志向性群	17.87	4.80	.71	<i>n.s.</i>
	活動志向性群	17.34	6.17		
積極的な対者関係	関係志向性群	25.68	4.68	5.22	$p<.001$
	活動志向性群	21.87	6.12		

の関連

*t* 検定の結果、「積極的な他者関係」について、関係志向性群が活動志向性群よりも、1%水準で有意に高い値が見られた。したがって、関係志向性群は活動志向性群よりも、「積極的な他者関係」が見られることがわかった。

考察と今後の課題

本研究で得られた主な結果は次の4つである。それぞれについて検討していこう。

- ① 質問紙Ⅰに一定の妥当性が見出された。
- ② 関係志向性と活動志向性に性差が見られなかった。
- ③ 関係志向性は、積極的な他者関係と関連が見られた。
- ④ 活動志向性は自律性と関連が見られた。

まず質問紙の妥当性について、十分な妥当性を得ることができなかったが、これについては次のことが考えられる。1つは関係志向性・活動志向性の概念そのものに無理があったのではないかという点である。2つめは質問紙の作成上に不具合があったのではないかということである。3つめは妥当性を見る質問紙に不具合があったのかもしれない点である。いずれも検討すべき課題であるが、特に第2の質問紙作成上の不具合に触れておきたい。本研究では、関係志向性・活動志向性を表現する文章や単語などを対にして提示し、そのいずれかを選択させる方法を採用した。調査協力者から、「興味深いやり方」や、「答えやすい質問法」と、好意的な評価を受けたが、関係志向性・活動志向性とは、元々個人の中で併存するものであり、対にして選択させる方法は適切でなかったのかもしれない。また、この対提示の選択法は統計的な分析を限定させるものであったことも指摘できる。そのために信頼性係数を算出することも断念せざるをえなかった。このようなことを考えると、別の形式の質問紙を考えていくことが、今後求められるといえよう。

次に関係志向性・活動志向性の性差が見られなかったことについてであるが、筆者のなかでは、女性に関係志向性が強く、男性に活動志向性が強いと考えるところがあった。しかしその考えは支持されなかった。このような結果は、現代社会の男性と女性のボーダレスを反映しているものなのか、それとも調査協力の学生の所属する大学の特徴・特性の表れなのか、ここではいずれかを決めがたい。そのためには、別の特徴・特性を持った大学の学生を対象にして調査を広げていくことが求められる。

3つめは、関係志向性が積極的な他者関係と関連がみられたことであるが、これは予想通りの結果であった。「家族や友人関係など具体的な人間同士の関わり」に人生の価値や喜び、満足を感じる人の傾向」を示す

関係志向性が、「暖かく満足できる、信頼できる他者関係という感覚」である積極的な他者関係の構築に関連があることは素直に理解できる。関係志向性の高い人が、いったいどのような行動を行い、それが積極的な他者関係の構築にどのように結びついていくのかは興味のある点であるが、これは今後の課題であるといえよう。

最後の点、活動志向性が自律性と関連が見られたことだが、これも予想できた結果であった。この点についても、活動志向性の高い人が、具体的にどのような行動を選択し、それが自律性の確立にどのように結びついていくのかに関する解明は今後の課題である。

文献

エリクソン, E. H. 仁科弥生訳 1950(1977) 幼児期と社会1 みすず書房 p.340  
 藤木五月・井上祥治 2007 中学生の生きがい感体験測定尺度の開発と妥当性 岡山大学教育実践総合センター紀要, 7, 125-133.  
 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究 64(2), 115-122.  
 小林司 1989 「生きがい」とは何か—自己実現へのみち— NHK ブックス  
 堀毛一也 2009 Human strengths と人生目標及び樹幹的充実感の関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 18, 158-159.  
 三隅二不二 1966 新しいリーダーシップ—集団指導の行動科学— ダイヤモンド社  
 西田裕紀子 2000 成人期女性の心理的 well-being に関する研究—心理的 well-being 尺度の作成— 教育心理学研究, 48(4), 433-443.  
 大野久 1981 現代青年の充実感に関する研究 名古屋大学昭和56年度教育心理学専攻修士学位論文概要  
 Ryff, C. D. 1989 Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.  
 佐藤文子・山口浩・斉藤俊一・田中弘子・千葉征慶・岡堂哲雄 1993 日本版 PIL の妥当性, 信頼性の検討 岩手大学人文社会科学部紀要, 52, 85-97.  
 島崎敏樹 1974 生きるとは何か 岩波新書  
 シュブランガー, E. 伊勢田耀子訳 1919(1961) 文化と性格の諸類型 明治図書  
 高井範子 2002 人生に対する後悔および充実感の視点による生き方態度に関する研究 大阪大学教育学年報, 7, 131-142.

## A study of construction a scale of relation/activity orientedness

Motoko AOKI (*Tokyo Seitoku University*)

Kunijiro ARAI (*Tokyo Seitoku University*)

This study aimed at (1) construction of a scale of relation/activity orientedness. (2) clarifying about its relation with psychological well-being, such as personal growth, purpose of life, autonomy, self-acceptance, climate control power, and positive others- relation. In the study 1, the three kinds of questionnaire of relation/activity orientedness was created. The questionnaire I makes text expression showing each orientedness a pair, presents it, and consists of 50 items in the questionnaire as which either is made to choose. The questionnaire II makes a pair the word or name of a person showing each orientedness, presents them, and consists of 21 items in the questionnaire as which either is made to choose. The questionnaire III carries out scene assumption, is the questionnaire as which either of the actions showing each orientedness is made to choose, and consists of ten items. Examination of the validity of three questionnaires was performed.

The study 2 tended to clarify relation of relation/activity orientedness, and psychological well-being.

The main result is as follows.

- (1) Fixed validity was found out by the questionnaire I .
- (2) Sex difference was not looked at by relation/activity orientedness.
- (3) Correlation of relation orientedness and positive others- relation was seen.
- (4) Correlation of activity orientedness and autonomy was seen

**Key words;** “ikigai” , relation orientedness, activity orientedness, psychological well-being, college student

*Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University*  
2014, Vol. 14, pp. 25-32